

【論文】

ブリヤート文学における「西と東」の文化的統合 境界の詩人 N. ニンブーエフ

佐藤 貴之

[Резюме]

Синтез культур Востока и Запада в бурятской литературе:
Поэт на границах -- Н. Нимбуев

САТО Такаюки

В данной статье мы рассмотрим парадигму «Восток-Запад» в контексте бурятской литературы, сформировавшейся после Октябрьской революции. Народ и культура Бурятии, которая жила сотни лет на рубеже Востока и Запада, приобрели глубокую толерантность к другим нациям, культурам. Толерантность, или мультикультурализм Бурятии весьма ценны в нынешней посткоммунистической России, когда страна ищет способ сохранить свою государственность. Мы проанализируем творчество народного поэта Бурятии Н. Нимбуева, рассматривая его через историю взаимоотношений Бурятии и Европейской России. Поэт Нимбуев оставил многочисленные работы, которые насыщены пушкинской «всечеловечностью». Именно образ «всечеловека», на наш взгляд, дает нам возможность преодолеть долговечный культурный конфликт «Востока-Запада» в русской культуре.

キーワード：ブリヤート文学、西と東、ニンブーエフ、プーシキン、石川啄木

*Речью россиянин я. Но только
гордый дух сынов своих храня
мать родного желтого Востока
наложила табу на меня.
Н. Нимбуев*

序論

1836年にP. チャアダーエフは『テレスコープ』に『哲学書簡』を発表した。架空の人物

に宛てたこの書簡集でチャアダーエフは、西欧に依存するロシア文化を批判するとともに、ロシア独自の文化、「ロシア文明」誕生の可能性を否定した。

そう、我々はいついかなるときも他民族とともに歩んだこともなければ、人類を代表するであろう西と東のいかなる偉大な民族に属したことも、そして西と東、いずれの伝統をうけつぐこともなかった。我々は時間の外を生きる民族に等しく、人類が成し遂げた世界の成長が我々の中において共有されることはなかった。＜中略＞我々は世界の偉大なる二つの基盤、西と東にまたがった。片方のひじは中国に、もう一方のひじはドイツに。そして我々は自らのうちに二つの偉大な精神性—— 悟性と理性を、全地球上の歴史を我々の文明の中において統合しなくてはならなかったのだ。しかし、神はその役目を我々には与えてくださらなかった。¹

チャアダーエフによれば、ロシアはピョートル大帝（ヨーロッパ）、タタール・モンゴル（アジア）という「西と東」の支配を受けながら、結果的にはそのいずれに属することなく、独自の発展を遂げる可能性を失った。独自の輝かしい歴史を持たないロシアは、無時間性の中を生きる根無し草に等しいとするチャアダーエフの極めて批判的考察は、今日に至るまで展開されてきた議論「西と東」の出発点となった。そしてマルクス＝レーニン主義という一種の西欧支配からの解放を迎えたポスト共産主義の今日、ロシアは新たな展望を前に自らが歩んできた歴史の意味を模索している。

チャアダーエフが提起した問題意識は、歴史的条件のほか、国家の地理的条件にも依拠している。ロシアはモスクワとペテルブルグのみならず、サハリンであり、カムチャッカでもある。ヨーロッパ・ロシアの文化圏に固執せず、広大であるはずの「ロシア」を追い求め、『シベリアの旅』（1890年）、『サハリン島』（1894年）を執筆したA. チューホフの姿はわれわれ日本人も記憶するところのものである。しかし、今日のロシアにおいて展開されている「西と東」の議論は、歴史的、地理的条件のみならず、人口の流動とも深く連動していることを忘れてはならない。

ロシアは度重なる亡命の波を経験してきた。1988年以降、国外に移住したロシア国籍者の数は150万から200万にも達するといわれ、その規模は1917年の十月革命以降に生じた第一次亡命の波に匹敵する。そして経済危機、社会不安から生じた出生率低下の結果、ロシア連邦の人口はソ連邦崩壊以降、減少の一途を辿ってきた。国内の空洞化は国家の安全保障を脅かすことでもあり、政府は旧CIS圏との連携を深め、中央アジアから安価な労働力を動員することで国力の維持を目指している。近年では徐々に出生率が向上しているが、旧CIS圏のアジア系住民が人口維持に貢献していることは確かである²。

このように、ロシアのアジア化は極東地域（中国系労働力）のみならず、ヨーロッパ・ロシアでも急速な勢いで進んでいる。しかし、こうした非ロシア系住民が社会の中に有機的な形で組み込まれることは稀である。非ロシア系住民はそれぞれの共同体を構成し、社会の多極化、民族間の軋轢が問題化している。そしてロシア系住民は「よそ者」に対する排他的感情を抱く一方、「よそ者」抜きの現代ロシア社会が存続し得ないのもまた事実である。2012年にノーベル賞作家の妻N. ソルジェニーツィナがV. プーチン大統領と対談し、国家統一、

国家の安全保障において文学が果たす役割の重要性を訴えたことは記憶に新しい。ソルジェニーツィナは義務教育の過程でロシア文学講義、ロシア語講義がおろそかにされている現状を指摘し、次のような批判を行った。「人々をつなぎとめるものはなんだとお考えですか？ テレビではなく、文学です …… 文学の迫害はナンセンスです。文学は国家の安全保障でもあるのです」³。

以上のことから、今日のロシアが直面している社会問題は、民族意識の高揚から生じる国民意識の低下と定義できるであろう。他民族によるモスクワ「占領」の結果、ロシア系住民の間では民族意識が高揚し、現代ロシアの国民意識は一種のアナーキズムに陥っている。即ち、「私はロシア国民である」という意識よりも、「私はロシア人である」という意識が優勢になっているといえる。

自由主義経済に移行し、支配的イデオロギーとしての共産主義が過去のものとなした現代において、これほど多極化してしまったロシアはいま自らの国家性をつなぎとめうる力を模索している。そして、国家統一の礎を文学に見出そうとするのがロシアの宿命かもしれない。国家と文学の問題に焦点をあてる際に想起されるのが A. プーシキンの詩『我は人業ならぬ記念碑を建立す』Я памятник себе воздвиг нерукотворный…（1836 年）である。

わが名は偉大なる全ルーシを駆け抜ける	そして永きにわたり民は我を愛でるだろう
そしてルーシに木霊す無数の言語が我を呼ぶ	穢れ無き魂を琴で呼び起こし
スラヴの誇り高き末裔、フィン、いまだ野蛮な	凄惨の世紀に「自由」を歌い
ツングース、ステップの友カルムイク。	倒れし者に情けを呼び覚ました我を愛でるだろう ⁴

ロシア文学の遺産プーシキンは民族の壁を越えた文化現象であり、その創作は超民族性を象徴している。F. ドストエフスキーの言葉を借りれば、プーシキンはまさに「全ての人」всечеловек であった⁵。ドストエフスキーはモスクワでプーシキン像が建立された記念式典において有名な「プーシキン論」Пушкинская речь（1880 年）を読み上げた。周知の通り、この演説でもって、チャアダーエフの『哲学書簡』以来、西欧派とスラヴ派の間で展開されてきた「西と東」の議論に一度は終止符が打たれている。

この演説においてドストエフスキーはプーシキンの創作を「世界的」、「全人的」とであると定義した。ドストエフスキーによれば、プーシキンは同じく「世界的」な文豪シェイクスピア、シラーとは異なり、あらゆる文化に変容していく超民族的な力を誇った詩人である。『エジプトの夜』、『モーツァルトとサリエリ』などからも明らかな通り、詩人は世界の歴史に創作の題材を求め、それぞれの文化に自ら変容していく力を持っていた。ドストエフスキーの考えによれば、プーシキンの創作に見られる「精神的統合」духовное единение は、真にロシア的な人間の特徴であった⁶。

このように、ロシア文学はその黄金時代から、民族の壁を越えた文化的営みとして成立しており、その超民族性、あるいは「全人性」всечеловечность を現代ロシアが国家統一の礎にしようとするのは当然の帰結といえよう。

ロシア文学を部分的に継承したソヴィエト文学もやはりスラヴ民族のみならず、あまたの民族を吸収し、一つの巨大な文化的総体として成立した。1934 年に開催された第一回ソヴィ

エト作家大会の壇上において、M. ゴーリキーをはじめとする文壇の大家らは諸民族の友好を主張し、その結果、非ロシア語話者の文学作品が次々と発表の機会を獲得していった。そして周知の通り、ソヴィエト時代に発刊された文芸誌『諸民族の友好』Дружба народов (1939-) はそうした作品発表の雑誌として機能してきた。

このような文化政策を通し、ソ連は超大国の統一を文化的側面からも補強しようとした。ただし、あとで見ると、ソ連の文化政策は決して他文化の独自性を保護したものではなく、ソヴィエト文化中心主義とも呼ぶべき排他性に根ざしていた。それと同時に、非ロシア系民族がロシア文化のアイデンティティ形成に与えた影響は黙認されたといえる。しかし、「プロシアのスラヴ主義者」と呼ばれた思想家 O. シュペングラーは、ボリシェビズムを先導したレーニンとモンゴル帝国を築いたチンギスハンを重ねあわせ、ロシア文化に潜むアジア性を指摘した⁷。シュペングラーにとってロシアは紛れもないアジアであり、「タタール・モンゴルの軛」を経験したロシア人は騎馬民族以外のなにものでもなかった。まさに騎馬民族としての記憶がロシアの人間に特徴的な放浪への愁いを生み、ゴーリキーや A. プラトノフの創作に登場する「東洋的」人物たちの土台を成しているといえよう。

西欧化以前のロシア文化はタタール・モンゴルの支配を通してアジア的要素を否応なく受容し、その歴史は野蛮な体罰や、専制政治など、否定的要素として近代知識人たちの脳裏に焼きついた。そしてロシアの広大なステップは、騎馬民族の襲来を許す場として恐れられた。しかし、その一方でこのステップはロシア文化に根ざしたアジア性を想起させる場でもある。その典型的な例として、ドストエフスキーの『罪と罰』(1866 年) が示唆に富む。

『罪と罰』に収められたエピソードでは、キルギス平野を臨む西シベリアのオムスクに流されたラスコーニコフの生活が描かれているが、ここで作品の主人公は自由を欲しいがまににする騎馬民族のキルギス人を前に愁い *тоска* をおぼえる。

そびえ立つ川岸からは広大な景色が開けた。対岸の彼方からは歌声がかすかに聞こえる。対岸では、太陽に照らされた悠久のステップでは、かすかに見て取れるほどの点となって騎馬民族のユルタが点在していた。対岸には自由があり、別の人間たち、我々とは似ても似つかない人間たちが生きていた。対岸はまるで、時間が止まったかのようだ<中略>。ラスコーニコフは不動のまなざしで座していた。彼の思考は幻想、瞑想へとうつりかわっていった。彼は何を思うでもなかった。ただ、ある種の愁い *тоска* が彼を悩ませ、苦しめていた。⁸

騎馬民族を前にラスコーニコフがおぼえた愁い *тоска* は、ドストエフスキーの実体験に基づいたものであり、『死の家の記録』(1862 年) でも同様に、騎馬民族に対する愁い、憧憬の念が語られている。

『罪と罰』に立ち返ると、騎馬民族との邂逅を経てはじめてラスコーニコフは犯罪の哲学から解放され、精神的救済を得ていることが分かる。犯罪の哲学は「地下室の住人」の言葉を借りればまさに「死の始まり」であり、西欧化を生きたラスコーニコフの救済はヨーロッパ・ロシアではなく、シベリアでこそ生じえたといえるだろう。ニコンの宗教改革以来、シベリアには分離派教徒(ラスコーリキニ)が暮らし、彼らはヨーロッパ・ロシアとは異な

る文化圏を生きた⁹。母なるロシアから切り離されたラスコーリニコフは、分離派教徒、騎馬民族のシベリアで再び「ロシア」に回帰したのであろう。

ロシアは西でもなければ東でもない、とするチャダーエフの主張は、裏を返せばロシアは西でもあり、そして東でもある。プーシキン、スキタイ主義 Скифство を牽引した A. ブローク、その影響下にあった L. レオーノフ、B. ピリニャークらは東でもあるはずのロシア、自己の中に顕在するアジア性を看過することはなく、こうした作家の創作には、ステップやオールドといった中央アジアの表象が極めて重要な位置を占めている。

植民地化を生きたブリヤート

J. キップリングは「西と東」が習合することはないとしたが、ピリニャークは『日本印象記』 Корни японского солнца (1927 年) で「西と東」の境界を生きる日本文化の特殊性を分析し、日本近代文学に関する先駆的な考察をソ連の文壇で発表した (1927 年)。ピリニャークの東洋、そして日本に関する数多くの作品はソ連の文壇で熾烈な議論を巻き起こし、「西と東」の問題意識は再びアクチュアリティを獲得したといえる。そしてこの問題意識に 21 世紀の我々が取り組む上でも、ロシアの「西と東」の境界を生きたアジア系民族、東シベリアのブリヤート・モンゴル (以降、ブリヤート) の歴史は示唆に富む¹⁰。

シベリアを東進するコサックに対し、ブリヤート人は 17 世紀中頃から毛皮税を払い、エリザヴェータの治世 (1741-1762) にロシアへ帰属した。ブリヤート人は東進するコサックと対立することはあったものの、帰属以降はロマノフ朝と親密な関係を構築してきた¹¹。そしてロマノフ朝へ忠誠を誓ったブリヤート人に対し、1741 年に時の皇帝は帰属民が篤く信仰するチベット仏教をロシア帝国の正式な宗教として承認した。それ以来、騎馬民族ブリヤート人は国境を守るコサックとして帝国の繁栄に貢献してきた。ただし、その歴史には負の側面も多く認められる。

サハリンへの旅路を前にチェーホフが手にした S. マクシーモフ (1831-1901) のシベリアに関する先駆的研究『シベリアと流刑』 Сибирь и каторга (1871 年) では、ブリヤート人に関する詳細な記録が収められている。当時の東シベリアは流刑の中心地であり、ブリヤート人は徒党を組んで犯罪行為、反乱を企てる脱獄囚の懲罰行為に従事することを余儀なくされ、その過程で無数の犠牲者を出した¹²。また、シベリアに送られた流刑囚は男性が大半を占めたため、ロシア人男性はブリヤート人女性 (またはエヴェンキ人女性) と結婚するケースが多く、二つの民族の交流から、カルィム карым という名のクレオールも発生している¹³。そしてロシア正教の洗礼を受けたブリヤート人も同様にカルィムと呼ばれた¹⁴。

ヨーロッパ・ロシアは 16 世紀末からシベリア開拓を進めていったが、ロシア人による「開拓」は、シベリアの先住民であるブリヤート人にとっては植民地化以外のなにものでもなかった点は踏まえておく必要がある。チェーホフはサハリンに対する友人の侮蔑的な態度に義憤を覚え、「我々はサハリンのような場所を参拝し、頭をたれなくてはなりません」と書き綴ったが、この手紙でチェーホフがサハリンの開発を「植民地化」と呼んでいることは特筆に値する¹⁵。サハリンは囚人にとって耐え難い苦悩の場であり、そしてサハリンの先住民にとってヨーロッパ・ロシアが採った政策は植民地化であった。そして、まさにサハリンの植民地化と同様のことがシベリアの先住民ブリヤート人にも当てはまる。

ブリヤートとロシア文学の邂逅は皮肉なことに植民地化の過程で発生した。デカブリストの蜂起（1825年）である。処刑を免れたデカブリストはシベリア、カフカスの各地で懲役についた。東シベリアに送られたデカブリストに限って見ると、受刑者たちはペトロフスキー・ザヴォド（現在のザバイカル地方ペトロフスク・ザバイカリスキー）で5年から15年の懲役についた。そして懲役を終えたデカブリストは1855年に皇帝からの恩赦を受けるまで、シベリアの各地で蟄居を義務付けられた。

国家反逆罪に処され、シベリアの流刑地を生きたデカブリストは、一般の流刑囚とは異なり、ブリヤート人に対して人道的態度をもって接した¹⁶。そしてベストウージェフ兄弟は地元民の信頼を得るため、自らブリヤート語を学ぶなど、「民衆の中へ」と入っていった¹⁷。まさにシベリアのデカブリストはナロードニキ運動の先駆けといえるだろう。

その一方、デカブリストが行った執筆活動も忘れてはならない。ベストウージェフ兄弟が親類に宛てた書簡では、ブリヤート伝統文化の風習が詳細に記録されており、民俗学的見地からも重要な資料といえる。流刑以前からペテルブルグで作家としての名声を得ていた兄のニコライ・ベストウージェフは、シベリアの地理、気候に関する学術調査を行うほか（『ゲーシ湖』）、ナポレオン戦争、デカブリストの蜂起に関する伝記（『ルィレーエフの回想』、『1825年12月14日』、『1815年のパリとロシア人』）を執筆した。その一方、弟のミハイル・ベストウージェフは、執筆活動や、農耕具、馬車の技術開発に専念するほか、東シベリアで初の文芸誌『キャフタの葉』Кяхтинский лист（1862年）に紀行文を投稿した¹⁸。そしてキュヘリベッケル兄弟はウラン＝ウデの風土に関する紀行文を残すとともに、ブリヤートの民話を収集した。

ただし、デカブリストの多くはブリヤート人との交流を保っていたとはいえ、自らの文化的アイデンティティを現地の文化と同化させることはなく、皇帝の恩赦を受けたデカブリストらは次々とヨーロッパ・ロシアへ帰還した¹⁹。そしてデカブリストが流刑中に残した創作には、ヨーロッパ・ロシアに対する望郷の念、そして失敗に終わった革命に対する寂寥の想いが綴られている。その例として、プーシキンの級友で詩人のV. キュヘリベッケルは流刑の身を嘆く詩を数多く残した。しかし、これらの作品をヨーロッパ・ロシアへ紹介することは固く禁じられ、デカブリストはまさに「机の中に」書き溜めていった。キュヘリベッケルの詩『10月19日』（1838年）からの引用である。

＜略＞ひとり 異邦人にかこまれ	稲妻を受け この棺に
脆弱にして寄る辺なく幾夜明かしたとか	最後の愛すべき詩人が倒れた
希望を葬った恐ろしい墓の前に	リツエイの聖なる一日の追憶がよみがえる
同胞らを葬った陰鬱な棺の前に	しかし そこにもはやプーシキンの姿はない！ ²⁰

チェーホフの『シベリアの旅』でも描かれている通り、当時のヨーロッパ・ロシアと東シベリアの交流は困難を極めた。シベリア鉄道（完成は1904年）が敷設されるまで、流刑囚や学術調査団、商隊をのぞき、「西と東」の間で交流が行われることは稀であったばかりか、シベリアがヨーロッパ・ロシアとおなじ「ロシア」として認識されることもなかった。チェーホフは『シベリアの旅』で、東シベリアの住人と交わした会話を記録している。

「だんなはロシアからおいでなすったんで？」彼は私にたずねた。

「そうです。」

「あたしや行ったことがないんでねえ。あっしらのとこにゃ、トムスクに行ったことのある野郎はいるが、そいつあ鼻高々でね、世界一周でもしたような気になってまさあ。」²¹

引用からも明らかなおと、チェーホフの話相手は、モスクワ、ペテルブルグをして「ロシア」と呼んでおり、ロシアにシベリアは含まれていないという認識が見て取れる。同様にチェーホフがイルクーツクから知人に宛てた手紙の中でも、シベリアとヨーロッパ・ロシアを別の国家として区別する傾向が見られる²²。

チェーホフがサハリンで出会った流刑囚の多くは、ロージナ Родина に対して憧憬の念を抱いていた。しかし、ロシア語のロージナという言葉は故郷であると同時に祖国でもある。異国とさえ思われるほどの辺境に身を置いた当時のロシア人たちは祖国への思いを強くしたのだろう。シベリアのロシア人たちは、キュヘリベッケルの詩にも見られるとおり、「ロシア」にありながら自らを異邦人として認識していた。

ブリヤート人をはじめとする東シベリアの先住民は、帝政ロシアに帰属し、流刑地の番人という不名誉な責務を果たしながらも、ヨーロッパ・ロシアとは異なる独自の文化圏を守り抜いた。しかし、十月革命以降、ブリヤート人の生活様式は根本的な変容を強いられる。ソヴィエト化、近代化、農業集団化、そして社会主義リアリズムなどの影響を受け、文化的変容が生じたのである。

遊牧民族ブリヤート人は農耕民族として生まれ変わり、移動式住居のユルタではなく、現代建築物に定住するようになる。そして、宗教を阿片とする共産主義体制下でブリヤート人が信奉するチベット仏教は弾圧を受け、戦間期の宗教撲滅運動を通して数多くのダツァン（チベット仏教の寺院）が破壊された。チベット仏教の承認以来、建立されてきたダツァンの多くはこの時期に姿を消し、ブリヤートの伝統文化は急速にソヴィエト化していった。そして革命は公用語の面においても多大な影響を与えた。ブリヤート人はモンゴル文字を捨ててキリル文字を受容し、初等教育においてはブリヤート語のみならず、ロシア語も教授されるようになった。

また、共産党体制下においては次第にロシア語文学作品も親しまれるようになるものの、社会主義リアリズムが金科玉条として喧伝される。ブリヤート現代文学の先駆者 K. ナムサラエフ（1889-1959）はブリヤート文学における社会主義リアリズムの父として不動の地位を築いた²³。そしてブリヤート文学は東シベリアで体制賛美、農業集団化、ソヴィエト化を推し進める共産党の媒体として機能した。無論、革命後にはソルボネ・トゥーヤ（1892-1938）のような同伴者作家も登場したが、トゥーヤは 1920 年代に弾圧を受け、そして 1938 年に処刑されたことにより、ブリヤート文学における同伴者文学の系譜は途絶えている。

革命後に登場したブリヤートの作家たちは、1925 年にスターリンが東方勤労者共産大学 KVTB の演説で提示した有名なテーゼ「内容においてプロレタリア的、形式において民族的」を体現すべく、共産主義の理念、農業集団化を賛美する文学作品をブリヤート語で数多く執筆した。また、スターリンのテーゼを遵守するためか、ブリヤートの作家がロシア語で執筆することは事実上禁止され、ロシア語で執筆、あるいはロシア語からブリヤート語に借用を

行った作家は、「ロシア主義」русизм に組したとして全体主義体制下の東シベリアで批判の対象となった²⁴。そのためソ連時代のブリヤート文学ではロシア語で執筆された作品はきわめて少なく、その多くがブリヤート語で執筆、ロシア語に翻訳された。こうした状況はスターリン批判後においても変わることはなく、そのテーゼは効力を有していた²⁵。

このように、帝政ロシアにおいてブリヤート人は流刑地の番人という不名誉な役割を負わされながらも、独自の文化を維持することが容認されていた。しかし、共產主義体制下においては否応なくソヴィエト文化を受容し、生活の根底から変容する必要に迫られた。そして「諸民族の友好」という共産党のプロパガンダを体現すべく、極めて制限された文芸活動への従事を余儀なくされた。つまり、全体主義体制下のソ連が1930年代以降に喧伝した「諸民族の友好」とは、あくまでソヴィエト文化中心主義に立脚した友好であり、非ソヴィエト文化の独自性が尊重されたとはいえない。

ニンブーエフ創作に見る「西と東」の統合

ブリヤートは数百年にわたる抑圧と変容の歴史を生き抜いた。そして、ヨーロッパ・ロシアによる一連の植民地化政策、あるいは「スラヴの軛」にも関わらず、ペレストロイカ以降のブリヤートはスラヴ民族をはじめとする他民族との間に極めて良好な関係を築いてきた。

ウラン＝ウデと日本の関係は複雑極まりない。日露戦争では大日本帝国軍と対峙したにもかかわらず、ウラン＝ウデは親日の都市として知られている²⁶。革命以降に誕生したソ連の傀儡国家「極東共和国」（1920-1922：首都が置かれたヴェルフネウジンスクは現在のウラン＝ウデ）では、両国の間には友好関係が築かれた²⁷。

日本とブリヤートの関係を見ていく上で、日本人のシベリア抑留がウラン・ウデの民衆に与えた影響も看過してはならない。ウラン＝ウデのブリヤート国立オペラ・バレエ劇場（以降、БГАТОБ）は日本人抑留者が建設した建築物（1952年建設）であり、日本との繋がりを想起させる歴史的記念物として親しまれている。「東京演劇アンサンブル」で芸術監督と務めた広渡常敏（1926-2006）は、ロシア国内で自らの作品を上演する機会を得たが、ヨーロッパ・ロシアではなく、あえて東シベリアのウラン＝ウデを選んだことは特筆に値する。広渡は坂口安吾の小説『桜の森の満開の下』を戯曲化し、1999年にБГАТОБで上演している。そしてウラン＝ウデの表象は広渡の創作に息づき、その戯曲『蜃気楼の見える町』（2000年）にはウラン＝ウデから引き揚げた元抑留者が登場する。また、ウラン＝ウデのナムサラーエフ記念ブリヤート・ドラマ劇場では、終戦から60年後にあたる2005年の記念式典で、実話に基づいて執筆された戯曲『日本の女、ドルゴル』Япон Долгор (B.エルディネーフ作) がブリヤート語で上演された²⁸。この戯曲では、ウラン＝ウデに抑留され、БГАТОБ建設に従事する日本人捕虜とブリヤート人女性（ドルゴル）の友愛が描かれている²⁹。そして、ブリヤート人の舞台演出家O. ユモフ（1982-）は日本とブリヤートをつなぐ架け橋として注目を集めている³⁰。日本との関係で見ていくと、2010年にユモフはオムスク第五劇場を率いて来日し、東京の秋田雨雀・土方与志記念青年劇場で『三十三回の失神』（原作A. チェーホフ、台本V. メイエルホリド）を上演した。そして2012年にユモフは芥川龍之介の作品集（『山鴨』、『藪の中』、『鼻』、『孤独地獄』、『片恋』、『雪』）を戯曲化し、『碁遊びー芥川ーノヴェル』Игра в го. Акутагава. Новеллы と題した作品をユジノサハリンスクのチェーホフ記念センターで上

演した³¹。

このように、ペレストロイカから今日に至るまで、ブリヤートと日本の文化交流は、戦後建築された БГАТОБ が中心となって着実に構築されてきた。そこには戦後、日本人抑留者が残した「遺産」もさることながら、ウラン＝ウデの民衆が数百年にわたる他民族との共生、そして度重なる変容の過程で培った文化的寛大さが大きく貢献しているといえるだろう。ウラン＝ウデの多文化主義を示す例として、ブリヤート文学を代表する民衆詩人 N. ニンブーエフ（1948-1971）の創作を取り上げたい。

ウラン＝ウデに生まれ、豊かな詩才をほこったニンブーエフは、ゴーリキー記念文学大学に入学し、詩人、作家、劇作家、評論家として旺盛な執筆活動を行う。しかし、ニンブーエフは在学中に不慮の死を遂げる。そして死後に詩人の遺作が集められ、それが選集『足を結われた雷』Стрекозённые молнии としてモスクワとウラン＝ウデで刊行された。³²

ニンブーエフが活動を始めた 1960 年代のブリヤート文学を俯瞰すると、「雪解け」以降の東シベリアではヨーロッパ・ロシアの「六〇年代人」らに追従するかのごとく、戦後のブリヤート文学を代表する作家たちが次々と文壇に登場していった（D. ウルズィトゥーエフ、I. カラシニコフ等）。ブリヤートの「六〇年代人」らは、「雪解け」以前に顕著であった農業集団化やソヴィエト権力の賛美、反ファシズムのプロパガンダから離れ、ブリヤートの伝統文化を志向する民族的特徴が顕著な創作活動に移行した（ただし、「雪解け」以降のブリヤート文学においてもシャーマニズムやチベット仏教の迫害は続いていた）³³。以下はウルズィトゥーエフの作品『少年時代』Детство からの引用である。この作品は「雪解け」をまたいで二度発表された³⁴。

僕は夢見ていた 旅に出ようと
電信柱をたどって
モスクワまで歩きぬこうと
仕事であふれかえる中樞まで
そして僕はやってきた ……
でも ステップの呼ぶ声が聞こえるのだ
僕は戻ってこよう ステップよ
これはしばしの別れだ！（1961 年）

そのころ僕は何を夢見ていたか？
電信柱をたどって旅に出よう
モスクワまで必ず歩きぬこうと
レーニンが生きている
モスクワまで！（1964 年）

二つの版を比較すれば明らかな通り、1961 年の版では望郷の念が語られているのに対し、「雪解け」が過ぎた 1964 年に発表された版では体制賛美の作品へと書き変えられている。つまり、「雪解け」期におけるブリヤート文学では比較的自由な創作が許され、作家たちの間では開放的の雰囲気が広まっていたといえる。

戦後に活躍したブリヤート人作家の多くは、モスクワのゴーリキー記念文学大学 Литературный институт им. Горького で学んだ。そしてヨーロッパ・ロシアという異なる文化圏に身を置き、東としてのブリヤート文化と西としてのヨーロッパ・文化の境界を生きることとなった。ブリヤートにおける「六〇年代人」の多くはヨーロッパ・ロシアに代表される西の文化に接触すると同時に、東へもその目を向け、東アジア、中でも日本に対する関心

を強くした。日本の古典詩をはじめブリヤート語に訳したのがウルズイトゥーエフであり、詩人は和歌の形式をブリヤート語で再現した実験的作品を残し、ブリヤートの「六〇年代人」たちに新たな創作の展望を用意したといえる³⁵。

このように、スターリンの死後に訪れた「雪解け」を契機として、ブリヤート文学では十月革命以降、急速に失われてしまった伝統文化に対する再考の意識が強まったといえる。ニンブーエフはまさにソ連が「雪解け」を迎え、ブリヤートの民族芸術が華やかに開花した時期に詩人としての創作活動を開始した。

ニンブーエフの創作世界は絶え間ない境界線上にあり、その創作には無数の対立項を読み取ることができる（西洋と東洋、ロシア語とブリヤート語、モスクワとウラン＝ウデ、スラヴ民族とモンゴル民族、都市と農村など）。まさにこの絶え間ない対立項の中に、ブリヤートが帝政ロシアに帰属して以来、経験してきた変容の記憶が刻み込まれているといっても過言ではない。そして、ニンブーエフのしなやかな詩才はチャダーエフ以来のロシア文学が解決を試みてきた文化的衝突を軽やかに解きほぐす。

ニンブーエフはブリヤートの伝統文学、ロシア文学のみならず、日本文学をはじめとする世界文学にも高い関心を寄せた。詩人の幼少期、ウラン＝ウデには数千人の日本人抑留者が過酷な労働を強いられていた。少年はその光景を前に、抑留者の祖国、日本に想いを馳せたのであろう。ニンブーエフはロシア詩の歴史では極めて稀な三行詩、五行詩を数多く残した（『嗚呼 古里よ』 О, родина, 『嗚呼 雲雀よ』 О, жаворонок など）。日本の俳人に捧げられた詩『芭蕉』 Басе や、和歌の形式とは呼べないものの、石川啄木の『一握の砂』を想起させる『人間と海』 Человек и море から明らかな通り、詩人は和歌への関心を逞しくした³⁶。そして、『夜はあさやけに』 Ночь напролет до самого рассвета に見られる詩人が悟性によって真理を獲得しようとする姿勢は、禅仏教の東洋的精神に通底するものであろう。

嗚呼 古里よ
そを前に
途切れたこの歌声よ（46）
* * *

『芭蕉』
汝の書に詠むこの三行
嗚呼 語ることなかれ 日本の賢人よ！
青田に思いを馳せ
五月蠅い蟬を耳に
我を忘れ 天を仰ぐだろう（86）
* * *

夜はあさやけに
並木道さまよい
存在の神秘おもう
「なくしたものはなに？」
掃除婦の声（142）

嗚呼 雲雀よ
天駆ける星
矢を避けん！（99）
* * *

『人間と海』
岸へ出て
海を前に涙でぬらすこのチョッキ
苛立ち 沈黙の海
涙を乾す潮風よ

…… 恥じらいながら家路につき
ぶつぶつと一人ごちる（153）

ニンブーエフの創作には俳句、短歌の形式をはじめ、日本的な感性が際立っている。無論、ニンブーエフが残した俳句、短歌の数々はいずれも厳密には純粋な音節詩と呼べないものの、俳句を作詩する上で重視される一情景の描写、余韻といった要素を詩人は巧みに再現している。和歌は音節詩であり、それを強弱音の規則的な交代で音楽性を生むロシア詩で再現することは困難を極める。そのためニンブーエフは三行詩、五行詩の執筆に際し、ロシア詩の韻律の伝統には依らず、自由詩を用いていることが指摘できる。

ブリヤート語は力点構造をもたないため、ブリヤート語でロシアの作詩法を再現することは日本語と同様に困難を極める。革命後のブリヤート詩人らは母語でロシアの作詩法を再現する試みを行ったが、このような実験に成功した例は極めて稀であった³⁷。しかし、規則的な韻律をもたない自由詩の形式はブリヤートの古典詩と極めて似ており、自由詩は日本文学、ロシア文学の伝統をブリヤート文学に組み込む上で極めて有効だったといえる。ニンブーエフはエッセイで「民族性を表現するうえで、韻を踏むことは致命的な間違いである」と述べているが、それはブリヤート語とロシア語の言語構造を明確に認識したうえで導き出した判断といえる³⁸。

ここでニンブーエフとブリヤート伝統文化の関係を目を転じると、詩人は首都モスクワで創作生活の基盤を築きつつも、ブリヤートの「六〇年代人」にならい、自らの伝統文化に対する再評価の意識を強くし、民族的特徴が顕著な作品を数多く残した。チェーホフはバイカル湖、サヤン山脈、そして広大なステップが入り乱れる自然を前に感嘆の声をあげ、ザバイカリエを「シベリアのボエジア」と賛美したが、その詩情はニンブーエフの中にも息づいたといえる。

ブリヤートの出自を隠さず、故郷を愛した青年は自伝的作品（『ブリヤートの詩人』 Бурятский поэт, 『おおい 誰か』 Послушайте, люди, 『エラヴナ森の秋』 Осень в еравнинских лесах など）を書き、ステップの吟遊詩人としてヨーロッパ・ロシアの文化圏を生きた。ニンブーエフの創作にはザバイカリエの雄大な自然が豊かな叙情性ととともに歌われると同時に、歴史的（チングス・ハン、オールド）、宗教的（シャーマン、ダツァン、仏陀）、民俗的（ユルタ、馬具、フルなどの伝統的弦楽器）モチーフに代表されるブリヤートの伝統文化、ソヴィエト化以前の歴史を象徴するさまざまな表象が見て取れる。ただし、「雪解け」以降の東シベリアにおいても革命前の伝統的精神文化は弾圧の対象であったため、ソ連時代に刊行されたニンブーエフの作品集では宗教的表象は削除、書き換えが行われている。

先述のとおり、ニンブーエフはブリヤートの文化圏に生まれたが、ロシア文学の伝統にも属している。その例として、ニンブーエフの創作には早世の詩人 M. レールモントフから受けた美学的影響が随所に見られる³⁹。また、青年の手紙には、「僕は軽やかに美しく死のう。駅へと向かうかのごとくこの世を去ろう。そこで残される人類に僕は約束の別れを告げるだろう」という一節が見られるが、ニンブーエフのこうした厭世観、悲劇的冷笑もまたレールモントフから継承したものといえるに違いない⁴⁰。ニンブーエフは、黄金時代のロマン主義を象徴する詩『己を信ずるなかれ』 Не верь себе (1839 年) にならい『役者』 Актер を執筆、レールモントフが生んだ「ダンボールの剣を振り回す悲劇役者」の姿を新たな色彩とともに描き出した。そしてニンブーエフは、レールモントフの創作で極めて重要な位置を占める作品『詩人の死』 Смерть поэта (1837 年) と密接な呼応関係を持つ『詩人が死ぬ』 Поэт умрет

という一行から始まる作品を残し、この中で「詩人」の悲劇的運命を描いた。

詩人が死ぬ	死へといざなうスキタイの槍 その欠片
メスが遺体を	悪魔の弾 その塊り 「ズドン ズドン」
詩情をつつむ大地の殻を切り裂く	炸裂した手榴弾 その破片 ……
硬直する心臓を取り出す	そして世界は知るだろう
見張るまなこ その先には	詩人の短命 その意味を
胸に深く突き刺さった	そして
インディアンの矢 火打石の切っ先	詩人の無垢な詩が
パパアが放った骨の鉋	見えない痛みにも慟哭した その意味を (81)

ニンブーエフは詩人の肉体と地球を重ねあわせ、詩人の肉体に刻み込まれた様々な民族の悲劇を具象化し、「詩人の死」を代償として文化、民族の境界を越えた「世界」との対話を試みる。ニンブーエフが描いた「詩人」は様々な文化に自ら変容していく文化横断的な表象として成立している。そして、この超民族的、普遍的な「詩人」という表象の中には、プーシキンを始めとするロシアの詩人たちが辿った悲劇的運命の足跡も見出せるだろう。

このようにニンブーエフの創作にはブリヤート・テキストのほか、日本・テキスト、ロシア・テキストが混在している。無論、チンギス・ハンの歴とした末裔であるブリヤートはヨーロッパ・ロシアにとっては「タタール・モンゴルの軛」を想起させる民族であるに違いない。そしてタタール・モンゴルによる支配、日露戦争を経験したヨーロッパ・ロシアが東に対する警鐘を鳴らしてきた以上、ブリヤート・テキストとロシア・テキストが詩人の創作の中で調和することは困難であるように思われる。しかし、ニンブーエフの創作で「西と東」のテキストは互いに反発することなく共生している。

ニンブーエフの創作で「西と東」を取り扱った作品は枚挙に暇がない。その中にはブリヤート人で始めて西欧的教育を受けた東洋学者 D. バンザーロフ (1822-1855) に捧げられた詩や、ロシア語とブリヤート語の差異を極めて特徴的な身体的感覚で表現した詩『ロシア語』Русский язык、「西と東」の血を受け継いだ民族としてロシア人を表象した『混血児』Метиска などがあり、「西と東」の問題意識が詩人にとって極めて重要なものであったことが分かる。そしてニンブーエフが「西と東」の文化的対衝突を解消するため果敢に取り組んだのが黄禍論の克服であった。

ニンブーエフは、『僕は途方もない力で持ち上げられ』Я был разбужен несусветной силой (76) という作品の中で、ルーシを焼き払ったタタール・モンゴルの蛮行を取り上げている。以下でその光景を見ていく (一部、省略)。

僕は途方もない力で持ち上げられ	処刑された兵たちの妻の胸中は
いにしえの鎧に釘打ちされた	火事の炎の中で鐘のように祈った —— 「戦い！」
鼻づらの馬はロシアの村々を	ルーシは蹄の下でのたうち回り
駆け巡り 息遣いは荒々しい	泣きつ面の少女を産み落とした —— 痛み
(一連)	(三連)

投げ縄をアラトー山脈に引っ掛け
途上の町々をことごとく撃砕し
黄金に輝く偉大な軍旗をたなびかせ
浅黒いオールドがヨーロッパへ攻め入った！

（五連）

ルーシは
憎しみ合う二つの民族の間で盾となり
聖なる使命を持っていた
だが 東から黄色い帝国がやってきた
カラスの翼が地平線を覆いつくした！

（六連）

語り手の「僕」は「途方もない」運命的な「力」で軍馬に乘せられ、「浅黒い」タタール・モンゴル軍（オールド）の隊列に加わる。そして頬骨が張ったチンギス・ハンの子らとともに「僕」は中央アジア（アラトー山脈）からヨーロッパへ突き進み、「西と東」にまたがるルーシに進軍し、蛮行の限りを尽くす。しかし、ニンブーエフはそれが夢であることを知り、安堵のため息を漏らすのである。

..... 僕は目を覚まし、幸福感に酔いしれた
すべては黒く、恐ろしい夢の中の出来事だった！
..... 僕の神は耳元で沈黙の涙を流していた
狂気の憎しみを僕に燃やしていた
（七連）

ニンブーエフは「タタール・モンゴルの軛」を悪夢として描き、その歴史をあくまで否定的な過去として提示している。つまり、詩人はブリヤート文化ではなく、ロシア文化の視点から暗黒時代の歴史を見ているのである。そして、東の民族に対してニンブーエフが犯した「裏切り」にブリヤートの神は怒り、詩人はその憎しみを一身に受けるのであった。

同じく、ニンブーエフが黄禍論の克服に捧げた作品『ロシアの詩人に告ぐ』 Русским поэтам は、ロシア文化に内在するアジア性、ヨーロッパ・ロシアがタタール・モンゴルから受け継いだ「遺産」を否定的な色彩で描いた詩人たちに対する贖罪であったかもしれない。ロシアの東から放たれた青年の小さな声は、「西と東」の共生を希求する祈りに満ちている。

『ロシアの詩人に告ぐ』

もう十分ではないか
昔日の涙を拭いながら
ヴィーさながら醜悪で恐ろしいタタール人を歌うのは

燃え尽きた
ルーシは昔日の朗らかさを取り戻し
頬を赤くした少女のように

眠たげな顔で鎧にふんぞり返り
毒々しく咲き誇った蓮のように
暗鬱な笑みを浮かべるタタール人を歌うのは
永遠 そう永遠に
アジア オールドの肉と魂は

春の雪を駆け散らす
そして東の民は
もはや腑抜けの民は
悪夢から目を醒まし
浅黒い手を諸君に差し出した（77）

この作品は、プーシキンがポーランドの独立運動に関連してフランスで巻き起こった

反露的活動に対する返答として書いた政治的作品『ロシアを中傷するものたちに告ぐ』*Клеветникам России* (1831 年) と極めて類似した作品構造を持つ。ただし、プーシキンの作品には愛国主義的高揚感と西欧社会に対する極めて挑発的表現が支配的であるのに対し、ニンブーエフの『ロシアの詩人に告ぐ』では、自己否定を通したルーシとの調和的空間が成立している。

最後に分析するニンブーエフの作品『もはや僕の歯に触れることない』*Не будет больше тыкаться мне в зубы* では、「亜麻髪の友」との別れ、「ロシアの友」に対する思慕の念が豊かな叙情性ととも歌われている。

もはや僕の歯に触れることない	僕は友に捧げよう
君の髪 赤毛のアザミ	とこしえならぬ記念碑を
ロシアの友よ 唯一無二の我が友よ	悲しい蠟の一本足
泣き女さへ雇えぬこの貧しさよ	そう君は 亜麻髪の友は
蒙古の僕はゆくだろう	偉大なる中道をゆく
穢れなきスラヴの教会へゆくだろう	ならば蠟は永遠に燃えるだろう (148)
老婆たちは道をあける 僕は彼女らに語りかける	

引用からも明らかな通り、ブリヤートの「僕」は宗教、文化、民族の壁を越え、「ロシアの友」へと歩み寄る。そして作品の中で詩人はブリヤート文化（蒙古の僕）とロシア文化（亜麻髪の子）を「悲しい蠟の一本足」という祈りの中で調和へと導く。文化の境界を軽やかに逍遙したニンブーエフは、偉大なプーシキンの姿を追いかけたのだろう。青年はプーシキンが築きあげた「人業ならぬ」*нерукотворный* 記念碑に倣い、「とこしえならぬ」*недолговременный* 記念碑を静かに建てた。

ニンブーエフの創作は多民族への友愛にあふれている。ただし、その友愛には全体主義体制下の文化政策にみられるソヴィエト文化中心主義のような排他性は見られない。詩人は自らの文化的アイデンティティを保ったままヨーロッパ・ロシアを受け入れ、「西と東」という文化的衝突を詩人としての自我の中で統合しようとした。まさにニンブーエフの創作は、プーシキンの超民族性を「雪解け」という新たな時代的文脈の中で再構築することであったといえる。しかし、辺境の文学に開花した超民族性、あるいは「全人性」をヨーロッパ・ロシアの文化的パラダイムに組み込むという偉業を成し遂げるには、詩人の死はあまりに早すぎたかもしれない。

結論

ブリヤート民族は帝政ロシアに帰属して以来、流刑地化という一種の植民地化政策を生き抜いた。そして共産主義政権の樹立とともに、ブリヤートの伝統文化は根底からソヴィエト化する必要に迫られた。しかし、ヨーロッパ・ロシアによる一連の植民地化政策、あるいは「スラヴの軛」にも関わらず、ペレストロイカ以降のブリヤートはスラヴ民族をはじめとする他民族との間に極めて良好な関係を築いてきた。その一方、「タタール・モンゴルの軛」が負の歴史として受容されたヨーロッパ・ロシアは、黄禍論に代表されるとおり、東の脅威を喧

伝し、「西と東」の共生をさらに困難なものとしてきた点は否めない。しかし、本論で取り上げたニンブーエフの創作からも明らかなおと、ロシアの辺境で育まれたブリヤート文学は「西と東」の共生を実現すべく黄禍論の克服に取り組んだ。そしてニンブーエフがよりどころとしたのは、「全ての人」プーシキンに見られる超民族性を自らのうちにおいて再構築することであった。そして、新たな「全ての人」、「西と東」の衝突を自らのうちにおいて解消した詩人ニンブーエフに戴かれたブリヤートと、その多文化主義は、現代ロシアの民族問題を解決する上で、ひとつの道標となってくれるのではないだろうか。

註

- 1 *Чаадаев П.Я.* Полн. соб. соч. и изб. письма.: В 2 т. М., 1991. Т.1. С. 323-329.
- 2 2010年の統計によれば、モスクワ市の人口は1,151万人で、ロシア系住民が993万人（91,6%）と記されている。当然のことながら、この統計には疑問を呈する声が上がっている。その例として、モスクワ市の民族構成に関して『論拠と事実』紙 *Аргументы и факты* が特集「首都では代表的民族を名乗るのが得策？」を組んだ。記者のG.シェイキナによれば、政府が発表した統計には、短期労働ビザで入国している旧CIS圏の低賃金労働者の数は反映されていない。そして993万人がロシア系住民と回答したものの、入国管理局の取り締まりを回避するために、「念のためロシア人と回答する」ものが多いとシェイキナは考えている。また、当然のことながら、政府の統計には、不法入国のアジア系住民の数は反映されていない。つまり、モスクワ市に暮らすアジア系住民は、統計に見られるよりもはるかに高い割合を占めているといえることができる。См.: *Шейкина Г.* Быть титульной нацией в столице безопаснее? // *Аргументы и факты*. 25.02.2012.
- 3 *Юнашев А.* Вдова Солженицына поспорила с Путиным о литературе. [<http://lifenews.ru/news/105430>] (2013年9月30日閲覧)
- 4 *Пушкин А.С.* Полн. соб. соч.: В 10 т. Л., 1977. Т.3. С. 340.
- 5 *Достоевский Ф.М.* Полн. соб. соч.: В 30 т. Л., 1972. Т.26. С. 147.
- 6 Там же. С. 131-132.
- 7 См.: *Шпенглер О.* (пер. с нем. В.В. Афанасьева.) Политические произведения. М., 2009.
- 8 *Достоевский Ф.М.* Указ. соч. Т.6. С. 421.
- 9 新教徒と旧教徒の文化的差異は根強く、シベリアの旧教徒は新教徒に対し差別的態度を取っていた。周知のとおり、ドストエフスキーの『死の家の記録』では新教徒の教会破壊を行った旧教徒が描かれている。
- 10 2010年に実施された全ロシア国勢調査の結果によれば、ブリヤート共和国の人口は97万人である。共和国の民族構成はロシア人が首位の66%（63万人）、ブリヤート人が30%（28万人）、次いでウクライナ人、タタール人、その他の少数民族となっている。また、ロシア国内におけるブリヤート人の総人口は46万人で、その大半がブリヤート共和国の首都ウラン＝ウデに暮らしている。
- 11 17世紀以降、ブリヤート人はロシア語の文献で「ブラートのタタール」、「ブラート」、「ブラートの人々」と呼ばれていた。См.: *Базаров Б.В.* История Бурятии.: В 3 т. Улан-Удэ, 2011. Т.2. С. 16.
- 12 *Максимов С.В.* Сибирь и каторга.: В 3 т. СПб., 1908. Т.1. С. 213.
- 13 カリムはモンゴル語で異邦人を意味するハルィム *харым* から派生した。このクレオールにちなんで、チタを首都とするザバイカリエ地方にはカリムスコエという村がある。異邦人と

という言葉の意味からも明らかな通り、このクレオールは伝統文化を重んじるブリヤート人がロシア文化へ帰属した同胞に用いた差別用語であることが分かる。

- 14 *Гениатулин Р.Ф.* Энциклопедия Забайкалья. [http://ez.chita.ru/encycl/concepts/?id=6757] (2013 年 9 月 30 日閲覧)

また、マクシーモフによれば、旧教徒はシベリアに移住した新教徒に対して冷淡であったことから、新教徒の移民はブリヤート人との婚約を望むことが多かった。См.: *Максимов С.В.* Указ. соч. Т. 1. С. 299.

ただし、カルィム人の民族的アイデンティティは次第に他民族と同化し、2002 年の人口調査以降カルィム人と回答したものはいない。

- 15 *Чехов А.П.* Собр. соч.: В 12 т. М., 1963. Т. 11. С. 399.

- 16 デカбриスト、そして東シベリアへ居を移したその家族は、自宅に教育施設を設け、ブリヤート人、ロシア人問わず、地元民に対して無償で教育を施したほか、医療活動にも従事した。また、発明家としての手腕を発揮したベストウーージェフ兄弟は、ブリヤート人を雇い手工業に着手し、ステップの環境に応じて開発した馬車「ベストウーージェフカ」を量産する。

- 17 治バイカルではイギリスの宣教師団 (1818-1840) が積極的な布教活動を展開していた。これらの宣教師はブリヤート人に教育を施すと同時に、プロテスタントへ改宗した。См.: *Хартанова С.Д.* Селенгинск – перекресток вековых дорог. Улан-Удэ, 2005. С. 32-40.

信心深いブリヤート人の中には改宗を拒むものが多く見られたと考えられる。デカбриストのトルソンが自宅に教育施設を設け、ブリヤート人の子供を受け入れた際、次のような会話が取り交わされた。「トルソン家から、娘を取り返すんだ。教育した後は、洗礼する気だよ」。См.: *Тиваненко А.В.* Декабристы в Забайкалье (селенгинские страницы). Новосибирск, 1992. С. 114.

ただし、一連の研究を俯瞰する限り、デカбриストがブリヤート人に対して改宗行為を行ったとする記述はない。むしろデカбриストはチベット仏教、シャーマニズムに高い関心を示し、ブリヤートの伝統文化を蔑視するような傾向は見られない。

- 18 *Тиваненко А.В.* Указ. соч. С. 94. 『キャフタの葉』は記念すべき初の文芸誌だったが、ロシア語の読者層が乏しい当時の東シベリアで文芸誌が広く親しまれることはなかった。キャフタは中国との貿易中継地として発達したことから、『キャフタの葉』も次第に商業誌として機能するようになり廃刊を迎える。

- 19 デカбриストの中で唯一 N. ベストウーージェフはブリヤート人との間に子供を残したが、親類はブリヤート人との婚約を認めなかったため、ニコライは生涯独身のまま流刑の日々を送った。См.: *Тиваненко А.В.* Указ. соч. С. 143-151.

- 20 *Орлов В.* Декабристы. Антология.: В 2 т. Л., 1975. Т. 1. С. 184.

- 21 *Чехов А.П.* Указ. соч. Т. 10. С. 22.

- 22 「おおむねシベリアの自然は (外見上) ロシアと大差ありません。多少の差はあるものの、一目見た限りではわからない程度です」、「シベリアは冷たく、広大な国 страна です」。そして手紙の中でチェーホフは冗談めかしつつ、自らを「アジア人」と呼んでいることは興味深い。詳しくはシベリア滞在時の書簡集を参照。См.: *Чехов А.П.* Указ. соч. Т. 11. С. 414-466.

- 23 *Соктоев А.* Основоположник бурятской литературы (К 80-летию со дня рождения Хоца Намсаракава) // Байкал. Улан-Удэ, 1969. № 3. С. 152-156.

- 24 *Уланов А.И. и др.* История бурятской советской литературы. Улан-Удэ, 1967. С. 169-170.

- 25 *Жимбиев Ц.* Современность и творчество молодых // Свет над Байкалом. 1961. №. 1. Улан-Удэ. С. 144-151.

- 26 ブリヤート人で構成されたザバイカリエ・コサック部隊（1856 年設置）は戦時の際に召集され、日露戦争で大きな功績を残したことは、ブリヤート人の誇りとして今日まで語り継がれている。旅順の守備にあたったブリヤート・コサックの多くは戦後、捕虜として日本へ連行されたが、同じ仏教徒であるブリヤート人に対し、当時の日本国民は手厚い歓待を施している。См.: *Борсоев Б. Бурятские казаки*. [<http://www.diletant.ru/blogs/2494/248/>](2013 年 9 月 30 日閲覧)
- 27 1920 年 11 月、ウラン＝ウデの革命広場には共産主義革命をたたえる記念碑が建立された。この記念碑にはブリヤート語、中国語、韓国語、そして日本語で「キョウサンシュギノタメ センシシタ ショトウシエ」（共産主義のため戦死した諸闘志へ）と刻まれている。
- 28 ヤポン Япон はブリヤート語で「日本の」を意味する形容詞、Долгол Долгор はブリヤート人女性の名前。
- 29 ここで忘れてはならないのは、当時のソ連社会における「日本人」という言葉がもつ危険性である。1930 年代後半に社会を震撼させたスーリンの大粛清、その過程では無数のソ連人が大日本帝国軍のスパイとして処刑された（V. メイエルホリド、B. ビリニャーク、その他）。そして敵国のスパイという容疑は、日本との関係が深いウラン＝ウデの民間人にもかけられ、粛清の口実となった。つまり、粛清の嵐を経験したウラン＝ウデにおいて、日本人抑留者と関係を持つことは大きな危険を伴う行為だったといえる。
- 30 ユモフは舞台芸術スタジオを率いる演出家 S. ジェノヴァッチの第一期生として 2006 年に GITIS を卒業した。その後、新進気鋭の演出家として注目を浴びたユモフは「モスクワの新しい才能」賞を受賞（2007 年）、ユモフが演出した『マクサル：血まみれのステップ』Максар: Степь в крови（原作『マクベス』）、『帰還』Возвращение（A. プラトノフ作）はゴールデンマスクにノミネートされている。そしてユモフは世界演劇にも挑戦し、これまでシェイクスピアのほか、ラブレ、ゴリドーニ、イオネスコといった古典作家の作品をロシアの舞台上で上演してきた。ユモフはロシア演劇の伝統を受け継いだ一方、ブリヤートの伝統文化再構築にも貢献している。その例として、ユモフはユルタの移動式劇場「騎馬民族」Нуудэлчин を設立、その芸術監督として手腕を振り、БГАТОБ で『末っ子に語る御伽噺』Онгохон одхондоо（2010 年）、『勇者エンヘ・ブラート』Энхэ Булат Батор（2011 年）をブリヤート語で上演した。
- 31 *Снегирева М.* Спектакль по рассказам японского классика Акутагавы показали на Сахалине. [<http://skr.su/?div=skr&id=128761>] (2013 年 9 月 30 日閲覧)
- 32 ソ連時代の版はいずれも検閲のため、改作が作品の随所で行われている。そして思想的、政治的、宗教的側面から問題がある作品は、ベレストロイカを迎えるまで掲載されていない。そのため作品からの引用は次の文献から行った。Цит. по: *Нимбуев Н.* Стреноженные молнии. Стихи. Переводы. Проза. М., 2003. 引用に際してはページ数のみを記載する。
- 33 *Дугаржапова Т.М.* Поэтика Дондока Улзытуева. Улан-Удэ, 2001. С. 14
- 34 *Улзытуев Д.* (пер. с бурят. Е. Евтушенко) Млечный путь. М., 1961. С. 56.; *Улдызуев Д.* (пер. с бурят. М. Светлова) Избранная лирика. М., 1964. С. 17.
- 35 1960 年代以降のブリヤート文学では日本文学ブームが生じたが、その理由として日本とブリヤートが同じ精神的土壌にあることを指摘する研究者もみられる。ブリヤート文学研究者の L. ダンピーロワによれば、ブリヤート文化と日本文化はおなじ東洋の世界観、あるいは悟性に根ざしており、まさにこの文化的共通項がブリヤート民族をして、日本文化を自らの文化として受容させることを可能としている。См.: *Дамтилова Л.* Японские мотивы в поэзии Намжила Нимбуева. [<http://nimbuev.buryatia.org/namzhil/article.php?view=9>] (2013 年 9 月 30 日閲覧)
- 36 ニンブーエフは日本の俳人の中でもとりわけ石川啄木を愛読したものと思われる。ニンブーエフの散文作品では「タクボク」Такубоку の名前が頻繁に登場する（『スヴェトラーナ』

Светлана、『少数民族』Нацмены)。短編『少数民族』では日本語訛りのロシア語を使うブリヤート人が『一握の砂』を朗読するシーンが描かれている。См.: Нимбуев Н. Стреленные молнии. С. 272.

37 Дугаржапова Т.М. Поэтика бурятского стиха. Улан-Удэ, 2002. С. 26.

38 См.: Нимбуев Н. От чего не свободен «свободный стих» // Базарова Л.Ш. Вечная связь света и доброты.: сборник научных статей о творчестве Н. Нимбуева. Улан-Удэ, 2009. С. 4-11.

39 レールモントフのほか、ニンブーエフは 20 世紀最大の民衆詩人 S. エセーニンを愛読し、その創作を代表する詩『愛しきシャガネよ シャガネ』Шананэ ты моя, Шаганаэ (1924 年) の韻律を用いて『エセーニンに倣い』Подражание Есенину (156)、『天国は僕に必要なない』Небесный рай не нужен мне (126) を執筆した。

また、自由詩の伝統をロシア文学の中で確立しようとしたニンブーエフは論文「なぜ「自由詩」は自由ではないのか」От чего не свободен «свободный стих» を執筆し、その中で銀の時代を代表する詩人 А. ベールイと А. ブロークの創作を分析した。См.: Нимбуев Н. От чего не свободен «свободный стих». С. 4-11. これらのことから、ニンブーエフはロシア文学に関して深い造詣を持っていたことが分かる。

40 Нимбуев Н. Стреленные молнии. С. 7.

※ 本研究は、独立行政法人日本学術振興会の「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)」による支援を得て執筆されたことをここに明記する。